

沼津と牧水

大悟法利雄
(初代館長)

東京の生活にやや疲れた歌人若山牧水が沼津に移ったのは大正九年八月、まだ市にならぬ沼津町郊外の楊原村上香貫だった。その頃の上香貫は実に静かな田園であった。借りた家も割合に大きく、真向いの愛鷹山の上に富士が仰がれ、裏は野菜畑の続く環境がすばらしかった。気候は温暖だから、とかく病みがちだった妻子も次第に元気になる、牧水は安心して仕事にうち込むことができるようになった。

壮年時代で歌も円熟期に入った牧水は、沼津とその周辺の風物を盛んに歌い、また旅にもよく出かけて力作を見せ、『くろ土』『山桜の歌』という堂々たる二冊の歌集を出版すると共に、紀行文随筆など散文にも数々の秀作を遺して居る。この頃その担当する諸新聞雑誌歌壇の数が急



にふえてた牧水は、横浜の義弟長谷川銀作に頼んであった主宰の歌誌『創作』も沼津から出すことにした。こうして牧水は沼津永住を決意し、住宅新築を考え始めたが、大正十二年九月の関東大震災後拡がって来た住宅難のため立退きを迫られ、翌年八月、通称千本浜の小さな家に移った。住宅難が益々厳しいので、新築の資金集めに、自作の歌を書いた短冊・色紙・半折などを頒布する会を始め、九月にその第一回を沼津に催し、それを全国各地に拡げることになる。ところが、牧水には他に一つ多年抱き続けた詩歌総合雑誌の発行という大きな夢があり、ついでにそれもあることになった。

ここで牧水の生活が一変する。それから旅の回数と日数は急増しているが、資金稼ぎの揮毫旅行では歌などではしない。それでも無理を続けた牧水は、大正十四年千本松原の蔭で当時は沼津の西のはずれだった市道町に(現在の西松下町)約五百坪の土地を買い、住宅兼雑誌事務所を新築し、十月そこに移ると共に、大がかりな新雑誌発行の準備にかかり、十五年五月、遂に宿願の月刊誌『詩歌時代』を創刊した。独力で、しかも人口三万余りの小都市沼津で、大雑誌社にも例のない華やかな詩歌総合雑誌を出し得たのは奇蹟とも言えよう。『詩歌時代』が資金不足のため六号で廃刊となったのは実に惜しいけれど、ひとつの時代へ問いかけた牧水の熱烈な意気込みは、今も輝いているのである。

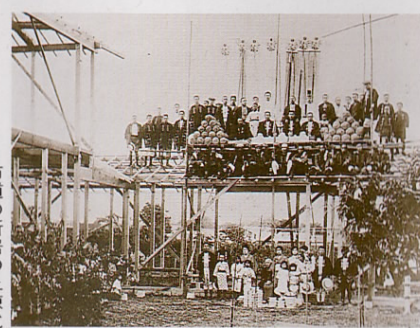
この十五年夏には静岡県当局に千本松原の一部伐採の案があり、沼津に反対運動が起ると牧水はその急先鋒となって、地方や東京の新聞に堂々たる文章を発表し、九月一日夜

の劇場国技館の「千本松原伐採反対市民大会」で松原愛護の熱弁を揮い、遂に県の松原処分を防止したことも忘れ難い。

牧水は、好きな酒を飲み、旅を楽しむ、よい歌さえあれば満足という小さな歌人ではなく、常に詩歌全体の向上隆盛を自己の天職と考えていた。『詩歌時代』廃刊後、その負債償還のため昭和二年朝鮮各地にまで長期の無理な揮毫旅行を続け、すっかり健康を害してから最晩年もそれは変らなかつた。

牧水は九州日向の生れだが、壮年からの半生を沼津市民として過ごした。沼津で最も愛したのは千本松原で、最後までその朝夕の散歩を楽しみ、沼津周辺の風物を歌い続けて、昭和三年九月十七日に没した。今は松原に縁の深い千本山乗運寺の墓に静かに眠っているが、その歌と心は、はつきり沼津に生きている。

没後六十年にして成った「沼津市若山牧水記念館」のオープンに当り、改めてそれを感じる私は、記念館が益々内容を充実し、規模をも拡大して、沼津というより日本の文化の向上に役立つことを祈らずにはいない。



市道の新居の上棟式



幾山河
越えさりゆかは
寂しさのはてなむ国ぞ
けふも旅ゆく 牧水

沼津千本松原の歌碑は、没後一年目に建てられた全国で最初の牧水歌碑である。富士山の裾野から運ばれた重さ十五トンの自然石は、姿かたちがどことなく牧水に似ていると言われてきた。毎春秋の牧水祭の碑前祭の行事の中で、碑はたつぷりと地酒「牧水」を浴びるのである。



千本松原の入口の千本山乗運寺の境内に若山牧水の墓がある。墓地の両脇に牧水と妻喜志子の歌碑が並んで建っているのが印象的である。聞きあつたのしくもあるか松風の今は夢ともうつともきこゆ 牧水 故里の赤石山のましろ雪わがふる春のうみべより見ゆ 喜志子

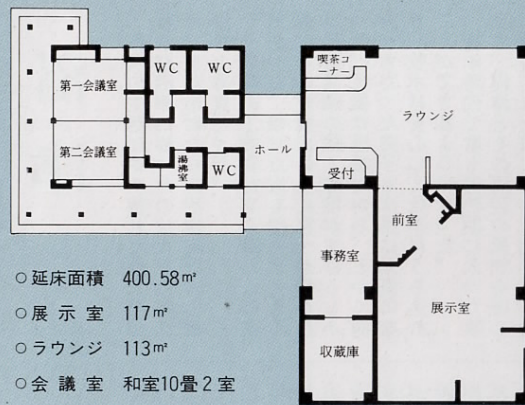


昔の千本浜と千本松原での牧水

沼津市若山牧水記念館



〒410-0849 沼津市千本郷林1907番地の11
電話・ファックス 055-962-0424
ホームページ <http://web.thn.jp/bokusui>
Eメール bokusui@thn.ne.jp



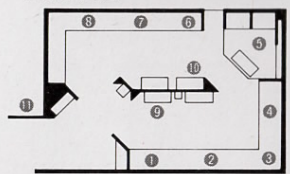
開館時間 9:00 ~ 16:30
(会議室は9:00 ~ 21:00)
休館日 毎週月曜日(祝日に当たるときは、その翌日)
年末年始(12月29日~1月3日)
観覧料 大人200円 小人100円
(20名以上の団体は2割引)



二面総ガラスのラウンジは、晴れた日は富士山が真正面に見えます。人と人との新鮮な出会い、ゆっくりくつろげる明るい雰囲気。珈琲やお抹茶を用意しました。炉を切った優雅な十畳間は、芝生の美しい庭園に面し、会議・小集会に最適です。



展示案内図



各コーナーの展示テーマ

- ①坪谷・延岡時代と東京生活 ②大学時代と沼津移住 ③書斎の復元 ④牧水と千本松原 ⑤詩歌時代 ⑥牧水と酒 ⑦妻・喜志子 ⑧牧水ゆかりの人々 ⑨沼津の文学風土

歌人若山牧水の生涯から永眠するまでの足跡とその輝かしい全仕事を一堂に集めて、編年体で展示しました。「詩歌時代」と「牧水と酒」「牧水と旅」は特別に詳細な資料を入れてあります。牧水歌風の真髓である浪漫的至純の歌の成立、或るいは歌人の信条であった「自己即詩歌」の境涯などを、日記や書簡・作歌ノートを介して、分かり易くリアルに表現しました。復元書斎の細部には、長子若山旅人氏の幼児の記憶が反映されています。



幾山河こえさりゆかば寂しさの
はてふむ國ぞけふもふゆくね水

沼津に若山牧水の記念館を作る運動は、三十有余年にわたり牧水顕彰の活動を続けて来た沼津牧水会が中心になって、商工業界、教育文化関係等各界有志二百数十名が集まり、「沼津牧水記念館建設発起人会」を結成したところから始まりました。同会の六年間の積極的な募金運動が実り、沼津市に六千円が寄付されたのです。これを受けて沼津市は、牧水にゆかりの深い千本松原の一角、海岸に面した景勝の地に「沼津市若山牧水記念館」を建設しました。資料については若山旅人氏を始め多くの方の絶大なご協力を得て、広い範囲の収集ができました。展示に関しては大悟法利雄氏の深く入念な構想を軸に、沼津市教育委員会と社団法人沼津牧水会が共同で実施しております。牧水歌風の真髓たる浪漫的至純の歌の成り立ち、「自己即詩歌」の歌境など、牧水の生涯の足跡とその全仕事とを克明に細密に表現致しました。どうぞゆっくり御覧下さい。

